

教 育 評 価 報 告 書

(平成13年度着手分)

新潟大学医療技術短期大学部・医学部保健学科

平成14年4月

新潟大学評価委員会

対象組織の現況

学部名及び所在地

学部名：新潟大学医療技術短期大学部（平成 15 年 3 月閉学予定）

新潟大学医学部保健学科（平成 11 年 10 月設置）

所在地：新潟県新潟市旭町通 2 丁目 746 番地（〒951-8518）

学科構成

医療技術短期大学部は看護学科，診療放射線技術学科，衛生技術学科，専攻科助産学特別専攻で構成され，新潟大学医学部保健学科は看護学専攻，放射線技術科学専攻，検査技術科学専攻で構成される。

学生総数

医療技術短期大学部の入学定員及び学生現員は看護学科がそれぞれ 80 人，165 人，診療放射線技術学科がそれぞれ 40 人，78 人，衛生技術学科が 40 人，80 人，専攻科が 20 人，21 であり，全体ではそれぞれ 180 人，344 人である。（平成 12 年 5 月現在）

新潟大学医学部保健学科の入学定員及び学生現員は看護学専攻がそれぞれ 80 人，81 人，放射線技術科学専攻が 40 人，40 人，検査技術科学専攻が 40 人，41 人であり全体では，160 人，162 人である。（平成 12 年 5 月現在）

教員数

看護学専攻においては教授 10 人，助教授 5 人，講師 5 人，助手 4 人，計 24 人であり，放射線技術科学専攻が教授 6 人，助教授 3 人，講師 2 人，助手 2 人，計 13 人であり，検査技術科学専攻が教授 7 人，助教授 4 人，講師 1 人，助手 3 人，計 15 人で全学科の教員総員 52 人である。（平成 12 年 5 月現在）

なお，現教員の全員が新潟大学医療技術短期大学部が閉学になるまで併任となる。また，学年進行に伴う純増人事が予定されており，最終的な教員数は看護学専攻 39 人，放射線技術科学専攻 20 人，検査技術科学専攻 21 人，計 80 人となる予定である。

教育目的及び目標

1. 新潟大学医療技術短期大学部の教育目的及び目標

新潟大学医療技術短期大学部の教育目的は「看護，診療放射線及び臨床検査に関する高度の知識と技術を教授研究するとともに，豊かな教養と人格を備えた医療技術者を育成し，もって国民の保健医療の向上に寄与すること」である。(学則及び学生通則第1条)教育課程の編成方針については同第19条にうたわれているが，要約すると，「教育課程の編成にあたっては，専門の学芸を教授し，職業又は實際生活に必要な能力を育成するとともに，幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い，豊かな人間性を涵養することに配慮する」である。

2. 医学部保健学科の教育目的及び目標

平成11年10月設置された医学部保健学科では，以下を基本理念と設定した。すなわち，「豊かな感性と人間愛に満ちた人道的な人格を有し，人の心を理解し，かつ専門的知識と技術を兼ね備え，全人的医療及びチーム医療の実践が可能な以下のような人材の育成を図り，国民的，国際的貢献はもとより地域医療・地域医療教育に貢献ができ，その職業を生涯に亘り誇りとする教育を行うことと，その基本となる研究を行うこと」である。

全人的医療を実践できる人材

人間性豊かで人道的倫理観を身につけた人材

医療技術分野における教育・研究の充実に寄与できる人材

臨床医療分野でコ・メディカルスタッフとして指導的役割を果たせる人材

国際社会の医療分野で活躍できる人材

地域医療の必要性を認識し，その向上に貢献できる人材

上記の理念を達成するため，本学科に看護学，放射線技術科学，検査技術科学の3専攻を置き，次の項目を達成するための基本的知識，専門知識及び技術を教育し，研究することを目標とした。

1) 教育目標：病者中心に自己開発を目指す優れた臨床医療技術者の育成

病む者中心の豊かな感性の習得

医療職者としての基礎知識と基礎技術の習得

チーム医療の方法についての学習

異文化理解の方法についての習得

自ら考え応用していく能力の錬磨

2) 研究目標：医療の臨床に寄与する独自性の強い研究

人々の健康維持に寄与する新知見や技術の開発

人々の疾病の予防と疾病からの社会復帰に寄与する新知見や技術の開発

医療に関する時代要請に対応できる新知見や技術の開発

医療分野で臨床に貢献できる新知見や技術の開発

生涯教育への動機付け

3. 医学部保健学科各専攻の教育目標

平成11年10月設置された医学部保健学科では、各専攻の教育目標を以下の如く設定した。

1) 看護学専攻の教育目標

人間が生物的、心理・社会的、倫理的存在であることを理解し、全人的医療の実践のために他の医療職者と協調して看護を行う能力を養う。

心豊かな幅広い人間性と教養を身につけ、現れた事象を科学的に分析・評価できる資質を養う。

年齢・性差に対応した健康についての基本知識を習得し、人間のあらゆる健康状態における心身の援助と生活の質を高めるために必要な看護の技術を培う。

看護の実践に際して、専門職業人としての倫理観をもち、自ら学び解決する能力と学際的知識を有効に応用し得る能力を培う。

他者との言語的・非言語的コミュニケーションの技法を学び、対象者の心理的な状況の理解と受容能力を培う。

在宅医療や学校保健など健康に関する地域の要求に応え、指導的役割を遂行できる能力を培う。

看護独自の役割と機能の視座から研究を行い、国際的視野で看護学の自立と専門性を発展させる能力を培う。

2) 放射線技術科学専攻の教育目標

人間性豊かで広い視野をもち、医療人にふさわしい倫理観と使命感を身につけ、チーム医療の中での役割を十分に果たす能力を培う。

放射線に関する基礎分野、特に物理的・生物的作用について深く理解し、急速な

放射線技術の発展に対処できる能力を培う。

情報処理技術の力量を高め、医療画像情報に対する知識と応用力を培う。

放射線による診断、治療、及び核医学検査に対して、的確な知識と技術を培う。

日々進歩する医用放射線機器の原理、構造、性能を深く理解し、それらを適切に操作し、診断に有用で十分な情報を引き出す能力を培う。

放射線防護の考え方を深く理解し、放射線の安全な使用及び管理のための的確な知識と技術を培う。

診療放射線技術学の分野で、専門知識を活かして研究・開発ができ、また、国際的な活躍ができる能力を培う。

3) 検査技術科学専攻の教育目標

豊かな人間性を備え、生命の尊厳を理解し、臨床実習を通してチーム医療の一員にふさわしい知性と教養と倫理感覚を培う。

生命科学を基礎に、人体の構造と機能に精通し、更に健康と病態を理解する能力を有し、将来専門分野で活躍するための基礎的能力を培う。

検査技術の基本を学び、その上に立って、自ら技術を習熟・発展させることができ技術の改革・進歩に対応できる能力を培う。

生命科学の知識を駆使した高度の検査技術に精通し、検査技術の分野において指導的役割を担い得る能力を培う。

検査結果を分析し、対象者の健康状態を把握・管理することで、予防医学や地域医療に貢献できる能力を培う。

国際的視野から人類全体の健康に関心をもち、修得した検査技術を地球全体の疾病予防・健康増進に貢献する能力を培う。

項目別評価結果

1. アドミッション・ポリシー(学生受入方針)

ここでは、対象組織における「アドミッション・ポリシー(学生受入方針)」の策定及び周知・公表状況やその方針に沿った「学生受入の方策」の実施状況を評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への程度を「貢献の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

保健学科は、豊かな感性と人間愛に満ちた人道的な人格を有し、人の心を理解し、かつ専門的知識と技術を兼ね備え、全人的医療及びチーム医療の実践が可能な人材の育成を目指している。

保健学科では、一般選抜の他に、推薦入学、社会人選抜、専門高校・総合学科卒業生選抜等の多様な入学者選抜方法を実施しているが、これは教育目的を達成するための人材を幅広く募集する努力の一端を示すものであり、評価できる。平成12年度の受験者の実質倍率をみると、2.7倍~7.3倍となっており、全般にほぼ満足すべき倍率を維持している。

医療短大の時代は当初合格者の入学辞退者が多かったが、推薦入学や第二志望制度の導入により入学辞退者が減少した点は評価できる。

入学志願者に対しては、平成4年度より受験生の夏休み期間中に学部説明会を開催し、平成11年度からは高校1年生を対象とした本学主催のオープンキャンパスや学外説明会に積極的に参加し、入学志願者の確保に努力している。

改善を要する点・問題点等

保健学科では教育理念及び目標を定めているが、これが教職員並びに学生に周知されていないようである。学生及び教職員の目につきやすい場所に常時掲示するなど、理念・目標の周知を徹底すべきである。

貢献の状況(水準:6)

取組は教育目標の達成のために大いに努力していることをうかがわせるが、なお改善の余地がある。

2. 教育内容面での取り組み

ここでは、対象組織における「教育課程及び授業の構成」が教育目的及び目標に照らし、十分実現できる内容であるかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

授業科目は「教養科目」及び「専門科目」に2分し、更に、「専門科目」を「専門基礎科目」及び「専門教育科目」に細区分している。教養科目は一般社会人としての教養を習得することを目的とし、30単位を最低履修要件としている。専門基礎科目においては、医療人として身につけておくべき最低限の基礎的専門知識として、「人体の構造と機能」「疾病の原因と成り立ち」「医療の倫理」「ケアの基本理念と実際」「環日本海医療概論」の5科目各2単位の計10単位を挙げ、これを3専攻共通の必修科目とする等、教育理念・目的に沿った取組がみられる。

専門教育科目は、それぞれの専攻の教育上の目的・特色に応じて74～78単位の範囲内で修得単位数を設定し、各専攻ともシラバスを作成し、教員間で講義内容の調整を図るとともに、学生の授業準備に役立てている。

総合情報処理センターに直結するパソコン室に教育用パソコン端末40台を設置し、学生全員にアカウントを与え、自由に出入りできる入退室管理システムを構築することにより、同学科のすべての学生がインターネットや電子メールを自由に活用できる体制をとっていることは評価できる。

改善を要する点・問題点等

学生による授業評価についての記載が見当たらない。もし行われていないとすれば、取り入れるべきである。

保健学科の設置により教員組織が充実し、非常勤講師による授業は減少した。しかし実験・実習のための教員(助手)は必ずしも十分ではない。

貢献の状況(水準:7)

取組は教育目標の達成のために大いに努力していることをうかがわせる。

3. 教育方法及び成績評価面での取り組み

ここでは、対象組織における「教育方法及び成績評価法」が教育目的及び目標に照らし、適切であり、教育課程及び個々の授業の特性に合致したものであるかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成への貢献の程度を「貢献の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

各専攻とも、講義、実験、実習、グループ学習、臨地実習など多様な教育方法をそれぞれの教育理念・目的に応じてバランスよく配置し、教育効果をあげる努力をしている。臨地実習における学生への安全対策として、肝炎予防対策、結核対策、針刺し事故への対応、放射線被曝防護対策など、学生への安全対策は行き届いており、臨地実習を前にしての倫理面の指導も十分に行われている点は評価できる。

看護学科では、1年次学生(保健学科では2年次後半)にearly exposureとして2週間の病棟実習を行っているが、これは入学後の早い時期に医療人としての自覚を促し、学習への動機付けを与えることを意図したもので、有意義な取組として評価できる。また全学科で国家試験対策として補習授業・模擬試験等を行っているが、本学科の目的を達成するための一つの試みとして評価できる。

改善を要する点・問題点等

看護学専攻、診療放射線技術学専攻では、学生主導の実習発表会が企画実施されている。これは学生の自主的な学習を促し、問題解決能力を養う意味で有効な方法と思われる。しかし衛生技術学科では教員主導のカンファレンスは行われているが、学生主導のものは見当たらない。専攻間での教育方法に関する連絡調整を密にし、学科全体としての取組が必要と思われる。

図書・資料の整備状況は十分でない。

貢献の状況(水準：7)

取組は教育目標の達成のために大いに努力していることをうかがわせる。

4. 教育の達成状況

ここでは、対象組織における「学生が身につけた学力や育成された資質・能力の状況や「卒業後の進路の状況」などから判断して、教育目的及び目標において意図する教育の成果がどの程度達成されたかについて評価し、特記すべき点を「優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標の達成の程度を「達成の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

国家試験の合格率は、各学科ともほぼ毎年全国平均を上回っており、平成12年度は看護学科93.6%(84.1%)、放射線技術学科91.4%(72.1%)、衛生技術学科87.5%(69.4%)であり、全学科で全国平均をはるかに上回る好成績をあげた(カッコ内は全国平均)。

放射線技術学科では、第1種放射線取扱主任者試験の受験を奨励し、平成12年度に7名の合格者を出している点は評価できる。

改善を要する点・問題点等

留年者・休学者・退学者の学科全体の総数は、平成9年度36名、平成10年度24名、平成11年度19名、平成12年度21名と漸減傾向にはあるが、修学指導の面でなお改善の余地がある。

看護学科、放射線技術学科では就職率は良好のようであるが、衛生技術学科では近年求人数の減少を反映して就職率が低下している。就職指導に力を入れるとともに、就職担当教員を中心に県外における就職先の開拓など、専攻全体で学生の就職活動を支える必要がある。

貢献の状況(水準：7)

取組は教育目的及び目標の達成にむけて大いに努力していることを示している。

5. 学生に対する支援

ここでは、対象組織における「学習や生活に関する環境」や「相談体制」の整備状況や「学生に対する支援」が適切に行われているかを評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点等」として示し、教育目的及び目標への貢献の程度を「貢献の状況（水準）」として示している。

特色ある取組・優れた点

クラス担任、学生生活・教務・学務の各委員会と学務係との連携により学生からの相談に対応する体制を整備している。学生のメンタルヘルス、人権、セクハラ等の問題に対応するために、学生相談員、人権問題相談員を置いている。不慮の事故に対応するための保険への加入率も93～95%と高い。新入生合宿研修など、新入生への対応に配慮している。

学生への経済支援として、奨学金募集、授業料免除等の学生への周知に努力しており、アルバイト募集の紹介も行っている。

学生自習室を設置し、また教育用パソコン40台を配備し、全学生にメールアドレスを与えるなど、自主的な学習体制を整備している。

国家試験対策、就職指導・支援活動のために、後援会から資金援助を受ける体制を整備している。

改善を要する点・問題点等

他大学との単位互換は、その必要性が認識されているが、実施されていない。また転学部・転学科への対応についても検討の必要がある。

就職率は約90～100%と良好であるが、就職状況は学科ごとに異なる。求人募集の少ない学科（衛生技術学科）では、就職開拓のための方策を検討する必要がある。

入学時ガイダンスにおいて自家用車・自動二輪車で通学禁止を通知し、学内に注意文を掲示するなど、事故防止に努めているが、平成9年度2件、平成12年度3件発生している。

貢献の状況（水準：7）

取組は教育目的及び目標の達成にむけて大いに努力していることを示している。

6. 教育の質の向上及び改善のためのシステム

ここでは、保健学科として「教育の質の向上及び改善のためのシステム」が整備され機能しているかについて評価し、特記すべき点を「特色ある取組、優れた点」、「改善を要する点、問題点」として示し、システムの機能の程度を「機能の状況(水準)」として示している。

特色ある取組・優れた点

臨床実習教育の改善システムとして実習指導者連絡会議がある程度機能している。臨床教授制度の導入(平成10年度)により、その機能の充実が期待される。

改善を要する点・問題点等

教員の教育活動の評価については検討が予定されているが、まだ組織的な取り組みは行われていない。

学生による教育評価が教員個々のレベルで一部に実施されているものの、学科全体としての取組がない。学生による授業評価アンケートを定期的の実施し、教育改善のために役立てるべきである。

F D (Faculty Development) のための研修はまだ検討されていないようであるが、早急に取り組むべきである。

貢献の状況(水準: 5)

取組は教育目標の達成のために努力していることをうかがわせるが、まだ改善の余地が多く残されている。今後一層の努力とその成果に期待したい。

総合的評価結果

医学科と保健学科を含めた医学部全体の教育目的・目標は新潟大学ホームページに提示されている。しかし保健学科案内リーフレットには、見開きのトップに教育目的・目標の要約が示されているものの、各専攻毎に定めた教育目標は、印刷物として明示されることもなく教員間でも周知が徹底していないようである。教育理念・目標の教職員並びに学生への周知を徹底すべきである。

特色ある取り組みとして、医療技術短期大学部では人文・社会・自然という従来の教養科目の枠組みにとらわれない新しい試みとして総合科目（選択，2単位）を開講した。これは特定の問題を取り上げ、それに専門分野を異にする教員が一致して取り組み、学生にも興味をもてるよう提示し、学生共々その問題を深めていこうとする科目であり、多くの学生が受講した。しかし保健学科への移行とともに消滅したのは惜まれる。今後、保健学科独自の授業科目として、再び起こすことができないか検討すべきである。保健学科では、専門教育との連携を図るために、新たに教養科目「入門医療英語」を1クラス40人体制で企画した。これは保健学科各専攻の教員が担当しているが、1年次の学生の動向を把握するとともに同じ専攻の学生が交流する機会を与える意味でも評価できる。

医学・医療の急速な変化に対応していくには、医療技術教育においてもIT化の流れを回避することはできない。教育用パソコン端末40台を設置し、同学科のすべての学生がインターネットや電子メールを自由に活用できる体制をとっていることは評価できる。また肝炎予防対策、結核対策、針刺し事故への対応、放射線被曝防護対策など、学生への安全対策は行き届いており、臨地実習を前にしての倫理面の指導も十分に行われている。国家試験合格率が何れの学科でもほとんど毎年全国平均を上回っていることも評価できる。

総合的にみて、学生の感染予防対策、IT化に乗り遅れないような情報教育、少人数クラス教育を通じての学生指導など、本学科にはいくつかの優れた点が認められる。しかしながら教育目的・目標を設定していながら周知徹底を図っていないこと、学生による授業評価が行われていないこと、FDへの取組が行われていないこと、図書・資料の整備が不十分なこと等、改善すべき点も少なくない。現状の把握・分析からさらに一歩進んで、教育理念・目標を実現するための具体的な施策を着実に実行し、目に見える形の教育成果があることを期待する。

評価結果の概要

1. 項目別評価の概要

1) アドミッション・ポリシー(学生受入方針)

保健学科では教育理念及び目標を定めているが、これが教職員並びに学生に周知されていないようである。理念・目標の周知を徹底すべきである。

2) 教育内容面での取り組み

教育理念・目的に沿った取組がみられるが、学生による授業評価の記載が見当たらない。もし行われていないとすれば、取り入れるべきである。

3) 教育方法及び成績評価面での取り組み

学生への安全対策は行き届いており、臨地実習を前にしての倫理面の指導も十分に行われている点は評価できる。

4) 教育の達成状況

国家試験の合格率は、各学科ともほぼ毎年全国平均を上回っており、一部の学科を除いて良好な就職率を維持している点は評価できる。

5) 学生に対する支援

学生自習室を設置し、自主的な学習体制を整備している点は評価できるが、他大学との単位互換や転学部・転学科への対応について検討する必要がある。

6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

学生による教育評価が教員個々のレベルで一部に実施されているものの、学科全体としての取組がない。学生による授業評価アンケートを定期的実施し、教育改善のために役立てるべきである。またFDのための研修はまだ検討されていないようであるが、早急に取り組むべきである。

2. 総合的評価の概要

本学科には、学生の感染予防対策、IT化に乗り遅れないような情報教育、少人数クラス教育を通じての学生指導など、いくつかの優れた点が認められる。しかしながら教育目的・目標を設定していながら周知徹底を図っていないこと、学生による授業評価が行われていないこと、FDへの取組が行われていないこと、図書・資料の整備が不十分なこと等、改善すべき点も少なくない。現状の把握・分析からさらに一歩進んで、教育目標を実現するための具体的な施策を着実に実行し、目に見える形の教育成果があがることを期待する。